千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告書

仲西遺跡a地点
勝田大作遺跡b地点
麦丸遺跡i地点
川崎山遺跡r地点
内野南遺跡f地点
内野南遺跡g地点
小板橋遺跡f地点
持田遺跡d地点
新東原遺跡k地点
堰場台遺跡a地点
北裏畑遺跡e地点
上高野白幡遺跡a地点
新東原遺跡l地点

平成25年度

八千代市教育委員会

凡　　例

1．本書は，八千代市教育委員会が平成24年度市内遺跡発掘調査事業として，国庫及び県費の補助を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。報告書作成作業は，平成25年度事業として行った。

2．本書に収録した発掘調査は，以下のとおりである。

№1	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因	調査担当
1	仲西遺跡ａ地点	八千代台西十丁目521番24の一部	平成24年４月17日～平成24年４月18日	６㎡/50㎡	個人住宅	宮澤久史
2	勝田大作遺跡ｂ地点	勝田637番２	平成24年４月20日～平成24年５月９日	280㎡/2,975㎡	宅地造成	宮澤久史
3	麦丸遺跡ｉ地点	大和田新田字麦丸台640番２・14	平成24年５月11日～平成24年５月24日	156.8㎡/1,319.13㎡	宅地造成	宮澤久史
4	川崎山遺跡ｒ地点	萱田字中台2256-22	平成24年６月12日～平成24年６月14日	20㎡/200㎡	宅地造成	宮澤久史
5	内野南遺跡ｆ地点	吉橋字内野1072	平成24年７月５日～平成24年８月８日	1,064㎡/10,790㎡	倉庫建設	宮澤久史
6	内野南遺跡ｇ地点	吉橋字内野1076-1ほか	平成24年８月10日～平成24年８月29日	341㎡/4,428㎡	工場建設	宮澤久史
7	小板橋遺跡ｆ地点	大和田字台田道230-33・38の各一部	平成24年９月４日～平成24年９月10日	30㎡/277.38㎡	宅地造成	常松成人
8	持田遺跡ｄ地点	村上字松葉1189-2ほか	平成24年９月６日～平成24年９月18日	100㎡/1,470.14㎡	宅地造成	宮澤久史
9	新東原遺跡ｋ地点	勝田字新東原1291-4	平成24年11月７日～平成24年11月15日	78㎡/777.5㎡	宅地造成	常松成人
10	堰場台遺跡ａ地点	大和田字堰場台283番１，字堀込250番９	平成24年12月26日～平成25年１月21日	729㎡/7,806.27㎡	宅地造成	宮澤久史
11	北裏畑遺跡ｅ地点	萱田町字萱田道798-4・６・７	平成25年１月18日～平成25年１月25日	44㎡/411㎡	宅地造成	常松成人
12	上高野白幡遺跡ａ地点	上高野字栗栗708番２・３・４	平成25年３月14日～平成25年３月26日	450㎡/6,551㎡	太陽光パネル設置	宮澤久史
13	新東原遺跡ｌ（エル）地点	勝田字新東原1247番21	平成25年３月18日～平成25年３月21日	30㎡/335.9㎡	個人住宅	常松成人

3．本文等で用いた記号（アルファベット）は，以下のとおりである。

　Ｇ　グリッド　　Ｍ　溝跡　　Ｔ　トレンチ

4．土層説明・出土遺物で用いた砂・礫の表記と大きさの関係については，土壌学及び国際法の基準に従い，以下のとおりである（単位：㎜，礫の大きさは長径）。

　巨礫300～200，大礫 200～100，中礫100～50，小礫50～10，細礫10～２，粗砂２～0.2，細砂0.2～0.02

5．出土した遺物のほか，写真・図面等の調査資料は，八千代市教育委員会が保管している。

6．本書の図版作成は，常松成人・山下千代子が行い，遺物写真撮影・編集・執筆は常松が担当した。

目　　次

凡例
目次
挿図目次
表目次　　写真図版目次
Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　各調査の概要
1．仲西遺跡ａ地点……5
2．勝田大作遺跡ｂ地点……7
3．麦丸遺跡ｉ地点……11
4．川崎山遺跡ｒ地点……14
5．内野南遺跡ｆ地点……17
6．内野南遺跡ｇ地点……21
7．小板橋遺跡ｆ地点……23
8．持田遺跡ｄ地点……26
9．新東原遺跡ｋ地点……31
10．堰場台遺跡ａ地点……34
11．北裏畑遺跡ｅ地点……38
12．上高野白幡遺跡ａ地点……41
13．新東原遺跡ｌ（エル）地点……44
報告書抄録……46

挿図目次

第１図　平成24年度調査市内遺跡位置図……3
第２図　仲西遺跡ａ地点位置図……5
第３図　仲西遺跡ａ地点トレンチ実測図……6
第４図　勝田大作遺跡ｂ地点位置図……7
第５図　勝田大作遺跡ｂ地点トレンチ実測図……8
第６図　勝田大作遺跡ｂ地点出土遺物……9
第７図　麦丸遺跡ｉ地点位置図……11
第８図　麦丸遺跡ｉ地点トレンチ実測図……12
第９図　麦丸遺跡ｉ地点出土遺物……12
第10図　川崎山遺跡ｒ地点・北裏畑遺跡ｅ地点位置図……14
第11図　川崎山遺跡ｒ地点トレンチ実測図……15
第12図　川崎山遺跡ｒ地点出土遺物……15
第13図　内野南遺跡ｆ地点・ｇ地点位置図……17
第14図　内野南遺跡ｆ地点トレンチ実測図……18
第15図　内野南遺跡ｆ地点出土遺物……19
第16図　内野南遺跡ｇ地点トレンチ実測図……21
第17図　小板橋遺跡ｆ地点・堰場台遺跡ａ地点位置図……23
第18図　小板橋遺跡ｆ地点トレンチ実測図……24
第19図　小板橋遺跡ｆ地点出土遺物……24
第20図　持田遺跡ｄ地点位置図……26
第21図　持田遺跡ｄ地点トレンチ実測図……27
第22図　持田遺跡ｄ地点出土遺物（１）……27
第23図　持田遺跡ｄ地点出土遺物（２）……28
第24図　新東原遺跡ｋ地点・ｌ地点位置図……31
第25図　新東原遺跡ｋ地点トレンチ実測図……32
第26図　堰場台遺跡ａ地点トレンチ実測図……35
第27図　堰場台遺跡ａ地点出土遺物……36
第28図　北裏畑遺跡ｅ地点トレンチ実測図……39
第29図　北裏畑遺跡ｅ地点出土遺物……39
第30図　上高野白幡遺跡ａ地点位置図……41
第31図　上高野白幡遺跡ａ地点トレンチ実測図…42
第32図　新東原遺跡ｌ地点トレンチ実測図……44

表目次

第１表　勝田大作遺跡ｂ地点出土遺物……９
第２表　麦丸遺跡ｉ地点出土遺物……12
第３表　川崎山遺跡ｒ地点出土遺物……15
第４表　内野南遺跡ｆ地点出土遺物……19
第５表　小板橋遺跡ｆ地点出土遺物……24
第６表　持田遺跡ｄ地点出土遺物……28
第７表　堰場台遺跡ａ地点出土遺物……36
第８表　北裏畑遺跡ｅ地点出土遺物……39

写真図版目次

図版１　仲西遺跡ａ地点……６
図版２　勝田大作遺跡ｂ地点……10
図版３　麦丸遺跡ｉ地点……13
図版４　川崎山遺跡ｒ地点……16
図版５　内野南遺跡ｆ地点……20
図版６　内野南遺跡ｇ地点……22
図版７　小板橋遺跡ｆ地点……25
図版８　持田遺跡ｄ地点（１）……29
図版９　持田遺跡ｄ地点（２）……30
図版10　新東原遺跡ｋ地点……33
図版11　堰場台遺跡ａ地点（１）……36
図版12　堰場台遺跡ａ地点（２）……37
図版13　北裏畑遺跡ｅ地点……40
図版14　上高野白幡遺跡ａ地点……43
図版15　新東原遺跡ｌ地点……45

Ⅰ　調査に至る経緯

八千代市は，首都圏のベッドタウンとして開発が進み，平成８年４月の東葉高速鉄道の開業以来，さらにその傾向を強め，沿線を中心とした新しいまちづくりが進んでいる。こうした状況の中，八千代市教育委員会（以下「市教委」という。）では，千葉県教育委員会の指導のもと，開発事業者等から事前手続きとして提出される「埋蔵文化財の取扱いについて（確認）」（以下「確認依頼」という。）に対処し，埋蔵文化財の保護に努めている。確認調査が必要と判断される事業については，国庫及び県費の補助を受け，「市内遺跡発掘調査事業」として調査を実施している。

以下は，平成24年度に実施した「市内遺跡発掘調査事業」の各調査に至る経緯である。

仲西遺跡ａ地点

未来タウン株式会社から，平成23年１月，八千代台西10丁目の個人住宅建設事業に係る確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は宅地で，一部が周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であった。このため，市教委は，確認地の一部である50㎡について「周知の埋蔵文化財包蔵地であることから，文化財保護法（以下「法」という。）第93条に基づく届出が必要」であることと，「その取扱いについて協議したい」旨（以下「遺跡が所在する旨」という。）を回答した。その後は，土地所有者（この項においては，以下「事業者」という。）と取扱いの協議を重ねた。その結果，確認調査を行うこととなり，平成24年２月に事業者から法第93条第１項の規定による土木工事のための発掘届（以下「法第93条の届出」という。）が提出され，市教委は４月17日に調査を開始した。

勝田大作遺跡ｂ地点

佐藤不動産から，平成23年12月，勝田の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内で，現況は畑地で遺物の散布が見られた。市教委は，遺跡が所在する旨を回答した。その後，事業主体者は大東建設株式会社代表取締役木下博氏（この項においては，以下「事業者」という。）となり，取扱いの協議を行った。その結果，確認調査を行うこととなり，平成24年２月，事業者から法第93条の届出が提出され，市教委は４月20日に調査を開始した。

麦丸遺跡ｉ地点

東海住宅株式会社代表取締役大沢武夫氏（この項においては，以下「事業者」という。）から，平成24年４月，大和田新田字麦丸台の宅地造成事業に係る確認依頼が提出された。確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内で，現況は畑地で遺物の散布が見られた。市教委は遺跡が所在する旨を回答し，取扱いの協議を行った。その結果，確認調査を行うこととなり，同月に事業者から法第93条の届出が提出され，市教委は５月11日に調査を開始した。

川崎山遺跡ｒ地点

大和ハウス工業株式会社から，平成24年，萱田字中台の宅地造成事業に係る確認依頼が提出された。確認地の現況は駐車場で，地表面観察はできなかったが，周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため，市教委は遺跡が所在する旨を回答し，取扱いの協議を行った。その結果，確認調査を行うこととなり，同年５月に大和ハウス工業株式会社船橋支店支店長井原健至氏から法第93条の届出が提出され，市教委は６月12日に調

査を開始した。

内野南遺跡ｆ地点

土地所有者（この項においては，以下「事業者」という。）から，平成24年５月，吉橋字内野の倉庫建設事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は山林で，地表面観察はできなかったが，周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため，市教委は，遺跡が所在する旨を回答し，取扱いの協議を行った。その結果，事業者が下草刈りと境界確認のための一部伐採を実施した後に確認調査を行うこととなり，６月，事業者から法第93条の届出が提出され，市教委は準備の整った７月５日に調査を開始した。

内野南遺跡ｇ地点

株式会社味泉代表取締役湯浅ふさ子氏（この項においては，以下「事業者」という。）から，平成24年，吉橋字内野の工場建設事業に係る確認依頼が提出された。確認地のうち工場敷地については，過去無し回答済みであったが，工場を増築する山林部分については，周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため，遺跡が所在する旨を回答し，取扱いの協議を行った。その結果，事業者が下草刈りを実施した後に確認調査を行うこととなり，同年６月に事業者から法第93条の届出が提出され，市教委は準備の整った８月10日に調査を開始した。

小板橋遺跡ｆ地点

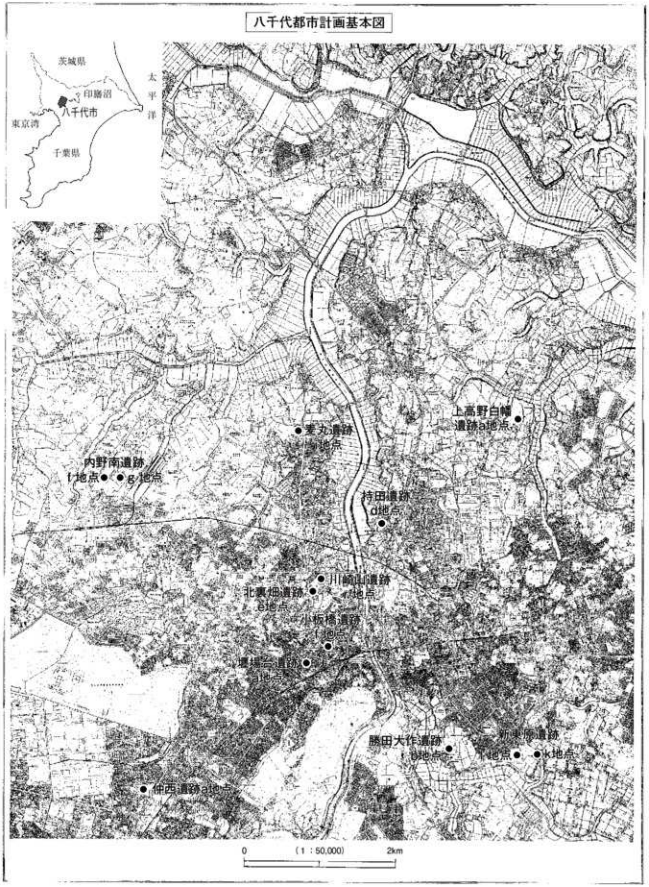
一建設株式会社代表取締役堀口忠美氏（この項においては，以下「事業者」という。）から，平成24年，大和田字台田道の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は荒蕪地で，周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため，市教委は，遺跡が所在する旨を回答し，取扱いの協議を行った。その結果，確認調査を行うこととなり，同年７月に事業者から法第93条の届出が提出され，市教委は９月４日に調査を開始した。

持田遺跡ｄ地点

株式会社オカムラホーム代表取締役金子保夫氏（この項においては，以下「事業者」という。）から，平成24年７月，村上字松葉の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は宅地及び畑地で，雑草が繁茂し地表面観察は困難であったが，周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため，遺跡が所在する旨を回答し，取扱いの協議を行った。その結果，事業者が下草刈りを実施した後に確認調査を行うこととした。８月に事業者から法第93条の届出が提出され，市教委は準備の整った９月６日に調査を開始した。

新東原遺跡ｋ地点

株式会社北総プランナー代表取締役佐久間高志氏から，平成24年，勝田字新東原の宅地造成事業のための確認依頼が提出された。確認地の現況は山林で，周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため，市教委は，遺跡が所在する旨を回答し，取扱いの協議を行った。その結果，確認調査を行うこととなり，同年９月に土地所有者から法第93条の届出が提出され，市教委は11月７日に調査を開始した。



第１図　平成24年度調査　市内遺跡位置図

（八千代都市計画基本図に加筆）

堰場台遺跡ａ地点

株式会社グランドラインコーポレーション代表取締役久保利栄氏（この項においては，以下「事業者」という。）から，平成24年10月，大和田字堰場台・字堀込の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は社宅跡地で，平成22年４月に当時土地所有者であった成田国際空港株式会社から確認依頼があった際に，当該地が昭和58年５月～６月に箱式石棺を検出し調査した堰場台古墳の隣接地であるため，試掘を実施した。その結果，堰場台古墳の周溝と考えられる溝跡を検出し，さらに弥生時代終末～古墳時代前期と考えられる竪穴住居跡１軒を検出した。このため，当該地に堰場台古墳と新発見の堰場台遺跡が所在する旨を千葉県教育委員会に報告したという経緯がある。以上により，遺跡が所在する旨を回答し，取扱いの協議を行った。現状では社宅建物の他アスファルト・コンクリート舗装やテニスコートなどの施設が残っていて，充分な確認調査の実施は困難と判断されたため，事業者が建物以外の舗装等を撤去した後に確認調査を行うこととした。平成24年10月に，事業者から法第93条の届出が提出され，市教委は準備の整った12月26日に調査を開始した。

北裏畑遺跡ｅ地点

株式会社レスパイトサービス代表取締役木内誠氏（この項においては，以下「事業者」という。）から，平成24年，萱田町字萱田道の宅地造成事業のための確認依頼が提出された。確認地の現況は畑地で，周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため，市教委は，遺跡が所在する旨を回答し，取扱いの協議を行った。その結果，確認調査を行うこととなり，同年11月に事業者から法第93条の届出が提出され，市教委は平成25年１月18日に調査を開始した。

上高野白幡遺跡ａ地点

未来タウン株式会社から，平成24年12月，上高野字柴栗の太陽光発電事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は駐車場で，周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり，近隣で遺構・遺物が検出されている。このため，市教委は，遺跡が所在する旨を回答し，取扱いの協議を行った。その結果，確認調査を行うこととなり，事業主体者は，松能株式会社代表取締役付雪花氏となり，平成25年３月に法第93条の届出が提出された。市教委は，３月14日に調査を開始した。

新東原遺跡Ｌ（エル）地点

土地所有者（この項においては，以下「事業者」という。）から，平成25年２月，勝田字新東原の個人住宅建設事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は畑地で，周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるため，市教委は，遺跡が所在する旨を回答し，取扱いの協議を行った。その結果，確認調査を行うこととなり，同月，事業者から法第93条の届出が提出され，市教委は地鎮祭後の３月18日に調査を開始した。

Ⅱ　各調査の概要

1．仲西遺跡ａ地点

遺跡の立地と概要

仲西遺跡は，市域南西部の台地上平坦面に立地する遺跡である。高津川から南に分岐する谷津の南部に当たる駒留（こまどめ）谷津が北にあり，駒留谷津から南に入る小支谷が東西にあるが，現地はほとんど谷津の影響が感じられない地形である。本遺跡は市街化が進んだ地域内にあり，試掘以外には調査事例がなく，奈良・平安時代の包蔵地とされているが，実態の不明な遺跡である。今回の地点は個人住宅の庭の一部で，標高約28mの平坦地である。

調査の方法と経過

庭の南東隅に２ｍ×３ｍ，６㎡のトレンチを１箇所設定，人力で掘削し遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は，平成24年４月17日から18日で，17日機材搬入，トレンチ設定，人力による掘削，完掘，精査，土層調査。18日実測記録，埋め戻し，機材撤収し，調査を終了した。

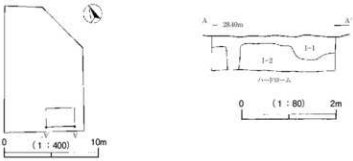
調査の概要

トレンチ南西壁の土層の観察所見は，表土（Ⅰ-1）はしまり・可塑性とも弱い黒褐色土でブロックなどの現代ゴミが混じる。Ⅰ-2層はしまりの強い褐色土で，ロームが混じる。盛土等造成工事に由来するものと考えられた。それらの厚さが0.7m以上あり，その下はハードロームであった。撹乱されており，良好な土層は検出されなかった。遺構・遺物とも確認されなかった。

調査のまとめ

本地点は造成工事等の影響を受け，遺跡としては破壊されていることを確認した。

第２図　仲西遺跡ａ地点位置図



第３図　仲西遺跡ａ地点トレンチ実測図

図版１　仲西遺跡ａ地点

（1）近景

（2）調査状況

（3）トレンチ掘削状況

（4）土層断面

2．勝田大作遺跡ｂ地点

遺跡の立地と概要

勝田大作遺跡は，市域の南東端，東から西～北へと屈曲して流れる勝田川を南～西に臨む台地上に立地する。勝田の集落と勝田台の住宅地に挟まれた広大な畑地が遺跡範囲である。

これまでの調査は，昭和60年度に遺跡北部当たる病院建設に伴い，八千代市遺跡調査会が6,168.02㎡を対象に発掘調査を行っている（ａ地点とする）。確認調査で古墳時代の竪穴住居跡13軒等を検出し，3,268㎡を現状保存とし，2,900㎡について引き続き本調査を実施した。その結果，古墳時代前期の竪穴住居跡６軒，古墳時代後期の竪穴住居跡３軒，奈良・平安時代の竪穴住居跡２軒等を調査した。また古墳時代後期の土坑２基からは貝ブロックが検出された。古墳時代の集落跡を中心に各時代の資料を得た。

ｂ地点は，遺跡中央部西端付近の畑地で，地表面に土師器14点，須恵器１点等の散布を確認した。標高約20m～22mで，北が高く南に向かって傾斜している。南西方向には，八千代市指定無形民俗文化財の勝田の獅子舞が舞われる円福寺がある。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて10mごとに区画し，アルファベットと数字の組合せで大グリッドを表現し，さらにこれを５mごとに４つの小グリッドに分け，１～４の枝番号を付けた。２m×４mのトレンチを大グリッドに２箇所を原則として配置し，合計35箇所280㎡分を設定した。これらを人力及び重機で掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は，平成24年４月20日から５月９日で，４月20日機材搬入，杭設置，トレンチ設定。24日・25日人力による掘削。25・26日重機による掘削。25日～５月１日トレンチ内精査。１日・７日土層調査，実測記録作業。７日～９日重機による埋め戻し。９日機材を撤収し，調査を終了した。

第４図　勝田大作遺跡ｂ地点位置図

調査の概要

比較的良好な土層を確認した。C4-1T，E4-1T，G4-1Tの北西壁の観察所見で，Ⅱa層（黒褐色土，腐植土層），Ⅱb層（黄褐色土，新期富士テフラ層），Ⅱc層（暗褐色土，ローム漸移層。G4-1Tでは層厚が0.5m以上あり，ロームの含有量が下部で多くなるため2層に分層した），Ⅲ層（ソフトローム層）が認められた。表土及び盛土のⅠ層はしまりがなく，褐色土（Ⅰ-1・2），暗褐色土（Ⅰ-3），黄褐色土（Ⅰ-4）が認められた。E2-1TではⅠ層の厚さが0.8m～0.9mあり，直下でハードローム層に達しており，撹乱されていると判断した。

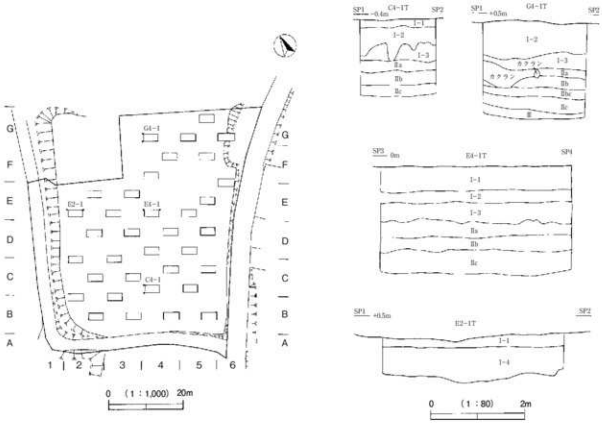
遺構は検出されなかった。遺物は191点が出土し，内訳は土師器が105点と約55%を占め，須恵器32点，陶磁器17点，縄文土器10点，小礫9点，焼成粘土塊4点，かわらけ・瓦・鉄製品各3点，剥片・瓦質土器・泥面子・鉄滓各1点等である。これらのうち11点を抽出し，図示した（第6図・第1表）。

調査のまとめ

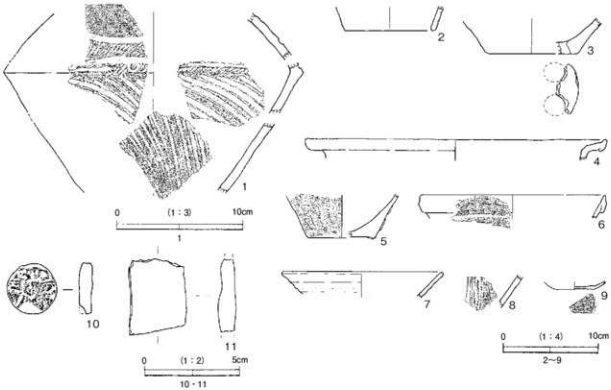
遺構検出には至らなかったが，良好な土層と土師器を中心とした多くの遺物を確認した。付近に縄文時代や古墳時代後期，奈良・平安時代の遺構が存在している可能性を示唆する結果と評価できよう。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市遺跡調査会（2007年）『千葉県八千代市勝田大作遺跡―埋蔵文化財発掘調査報告書―　平成18年度』



第5図　勝田大作遺跡b地点トレンチ実測図



第６図　勝田大作遺跡ｂ地点出土遺物

第１表　勝田大作遺跡ｂ地点出土遺物

No.	出土地点	器形	部位・状態	計測値（mm）	○砂土・石材　●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	D3-1	深鉢 管玉状土製	胴部	胴部最大径236	○細砂、雲砂 ●暗褐色、褐色	内）ミガキ。外）屈曲部の上は、沈線・上段縄文による網目縄文、円形竹管文、屈曲部の下は横～縦方向の条痕文。	縄文土器 後期加曽利B式
2	F4-4	甕	底縁部	復元底径96	○粗砂、赤褐色粒子 ●橙褐色	内）斜方向ナデ。 外）縁は面取りされる。横方向ナデ。輪積痕。	土師器
3	F4-4	甕	底部	復元底径98	○細砂、雲砂 ●内）褐色　外）暗褐色、赤褐色	底面に2孔が見える。内）ミガキ。外）斜方向のヘラ削り。 底外）ヘラ削り、ミガキ。	土師器
4	F4-1	甕	口縁～頸部	復元口径318	○雲砂多 ●内）黒褐色　外）褐色、暗褐色	内）横方向ナデ。 外）横方向ナデ。	土師器
5	D2-1	甕	底部	復元底径72	○雲母微砂、石英細礫多 ●内）淡褐色　外）褐色	内）ナデ。 外）化粧土のような焼成粘土が付着。ヘラ削り痕調著。	土師器
6	D2-4	甕	口縁部	復元口径194	○細砂多 ●内）橙褐色　外）褐色	内）横方向ナデ痕調著。 外）横方向ナデ痕調著。	土師器
7	F5-4	鉢	口縁部	復元口径170	○細砂、雲砂 ●淡褐色	口クロ成形。内）ミガキ。 外）横方向ナデ。	土師器
8	F5-4	寸り鉢	胴部	残存高35	○細砂 ●内）黒色　外）褐色	内）寸り目が7本見える。 外）ナデ、ミガキ。	瓦質土器
9	F5-4	小椀	底部	復元底径38	○細砂 ●淡橙褐色	口クロ成形。内）ナデ。 外）横方向ナデ。底外）糸切痕。	かわらけ
10	F5-4	混面子 円盤形 摩耗	略完形	径26　厚6～7	○細砂 ●橙色	ふくら雀か。	
11	F4-1	砥石	破片	残存40×30　厚9.5	○流紋岩か ●灰白色	使い込まれて薄くなっている。 ４面とも使用している。	

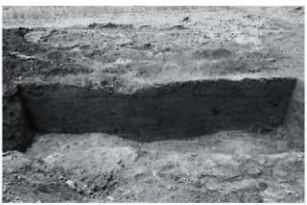
図版２　勝田大作遺跡ｂ地点

（１）調査状況

（２）C4-1T土層断面

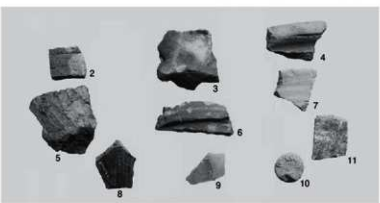
（３）E4-1T土層断面

（４）G4-1T土層断面



（５）E2-1T土層断面

（６）出土遺物－１－（番号は第６図と同じ）



（７）出土遺物－２－（番号は第６図と同じ）

3．麦丸遺跡ｉ地点

遺跡の立地と概要

麦丸遺跡は，市域の中央部，新川西岸の台地上に立地する。新川とその支谷である栄重谷津，桑納川とその支谷である甚左衛門谷津によって画された広大な台地上一帯が遺跡である。これまでに８地点の発掘調査が実施されており，ａ・ｂ・ｄ・ｈ各地点は縄文時代の遺構・遺物を主体とし，ｅ地点では弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されている。また，かつては遺跡範囲内に金塚所在塚，南西方向には麦丸台塚群があり，近世の塚が散在する地域であった。

ｉ地点は遺跡の南東部の標高約23mの畑地である。地表面には遺物が多く散布し，土師器183点，鉄滓７点，須恵器・泥面子各６点等を採集した。

調査の方法と経過

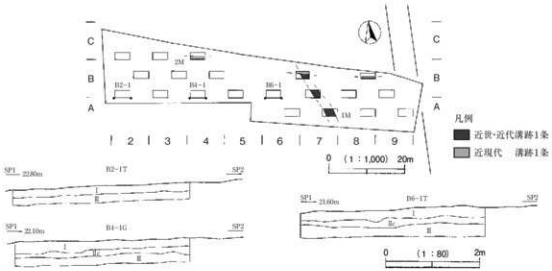
調査区を形状に合わせて10mごとに区画し，アルファベットと数字の組合せで大グリッドを表現し，さらにこれを５mごとに４つの小グリッドに分け，１～４の枝番号を付けた。２m×４mのトレンチを大グリッドに２箇所を原則として配置し，合計20箇所156.8㎡分を設定した。これらを人力及び重機で掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は，平成24年５月11日から24日で，11日機材搬入，杭設置，トレンチ設定。14日～17日人力による掘削。16日・17日土層調査，実測記録作業。17日・18日重機による掘削。17日～21日トレンチ内精査。23日土層調査，実測記録作業。24日重機による埋め戻し，機材を撤収し，調査を終了した。

調査の概要

土層の観察所見としては，B4-1T・B6-1Tの南壁では，Ⅰ層表土（耕作土）が厚さ約20cmあり，その下にⅡc層（ローム漸移層）が厚さ0.1m～0.2mあり，Ⅲ層（ソフトローム層）に達した。B2-1T・B7-1T南

第７図　麦丸遺跡ｉ地点位置図

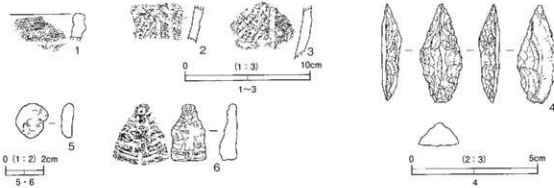


第８図　麦丸遺跡ｉ地点トレンチ実測図

壁ではⅡc層は確認されず，表土下でⅢ層に達した。Ⅲ層上面の標高は，B2-1Tで22.3m～22.4m，B6-1Tでは21.1m前後であった。

遺構としては，溝跡が２条検出された。１M溝跡はA7-4T～B7-1T～B6-4・B7-3Tで，２M溝跡はC4-1T～B6-4・B7-3T～B8-4Tで確認された。B6-4・B7-3Tで交わり，２Mが１Mを切っており，１Mは近世・近代，２Mは近・現代の溝跡と判断した。覆土は１M・２Mともしまりが弱く，最上層が黒褐色土，以下は暗褐色土を主体としていた。深さは１Mが0.7m～0.8m，２Mが0.8mである。

出土遺物は40点で，内訳は縄文土器17点，土師器・陶磁器各４点，焼成粘土塊・小礫各５点，石器・剥片・須恵器・素焼土器・鉄釘各１点である。表面採集とは異なり，縄文土器が主体を占めた。６点を抽出し図化した。



第９図　麦丸遺跡ｉ地点出土遺物

第２表　麦丸遺跡ｉ地点出土遺物

No.	出土地点	器形	部位・状態	計測値（cm）	○粘土・石材　●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	A7-4G	深鉢か	波状口縁部小片	—	○雲母，細砂　●淡褐色	内）ミガキ。 外）ミガキ，隆線。	縄文土器 中期加曽利E4式か
2	A7-4G	深鉢	胴部外面摩耗	—	○雲母，細砂　●褐色	内）ナデ，ミガキ。 外）磨消縄文，縄文不明瞭し，縦方向沈線２条間を磨り消す。	縄文土器 中期加曽利E式
3	A7-4G	深鉢か	胴部円形	—	○雲母，細砂　●褐色	内）ナデ，ミガキ，外）貝Ｌ磨消縄文，縦方向沈線。 底：土内の最大物が外れたことによる穴が５個所視覚える。	縄文土器 中期加曽利E式
4	B2-1G	尖頭器	略完形	39×17，厚9	○珪質頁岩 ●炭灰褐色，淡橙褐色	有舌尖頭器，左右対称に作られたタイプ。	縄文土器
5	表採	泥面子型抜き	略完形 磨耗	18×16　厚5～6	○細砂少 ●橙褐色	顔面。	
6	表採	泥面子型抜き	略完形 一部摩耗	30×18.5 厚4.5～9.5	○細砂 ●橙色	全身像。右手に扇子を持つ。	

調査のまとめ

地表面で多数の土師器片を採集したが，発掘の結果は，縄文土器が主体であった。早期条痕文の繊維土器と中期加曽利E式が出土した。遺構は近世～現代の溝跡２条が検出された。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市遺跡調査会（1982年）『千葉県八千代市麦丸遺跡』（ａ地点・ｂ地点）

八千代市教育委員会（2002年ａ）「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成13年度」（ｄ地点）

八千代市教育委員会（2002年ｂ）「千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書１」（金塚所在塚）

八千代市教育委員会（2003年）『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書』（ｃ地点）

八千代市教育委員会（2007年ａ）「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成18年度」（ｆ地点）

八千代市教育委員会（2011年）『千葉県八千代市麦丸遺跡ｈ地点―宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』

八千代市教育委員会（2012年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成23年度』（ｇ地点，ｈ地点）

図版３　麦丸遺跡ｉ地点

（１）調査状況

（２）B6-1T西壁土層断面

（３）B6-1T南壁土層断面

（４）A7-4T溝跡検出状況

（５）出土遺物（番号は第９図と同じ）

4．川崎山遺跡ｒ地点

遺跡の立地と概要

川崎山遺跡は，市域南部中央，新川西岸の台地上にある。

本遺跡においては，これまでに17地点で調査が行われ，弥生時代後期～古墳時代中期の集落跡等を中心に各時代の遺構・遺物が検出されている。

今回のｒ地点は，遺跡北西部の標高約23.5mの砕石敷きの駐車場である。

調査の方法と経過

２m×５mのトレンチを５m間隔で２箇所，20㎡分設定した。重機で掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は，平成24年６月12日から14日で，12日機材搬入，トレンチ設定，重機による掘削，トレンチ内精査。13日トレンチ内精査，土層調査，実測記録作業。14日重機による埋め戻し，機材を撤収し，調査を終了した。

調査の概要

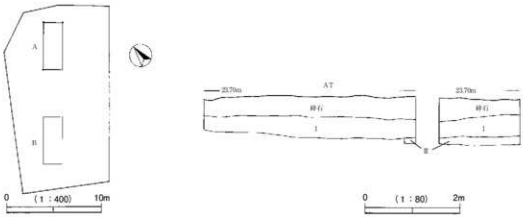
Ａトレンチ北西壁・北東壁の土層観察所見は，駐車場の砕石が厚さ0.3m～0.4mあり，その下に旧表土・盛土の暗褐色土が層厚0.3m～0.5m堆積し，その下でⅢ層（褐色土，ソフトローム）に達した。Ⅲ層上面の標高は22.7m前後であった。良好な土層は確認されなかった。遺構は検出されなかった。

遺物は，Ａトレンチから土器片２点が出土した。縄文土器片と土師器ロクロ坏片である。縄文土器を図示した。前期後半と考えられる。

調査のまとめ

遺物は縄文土器と土師器合計２点が出土した。遺構は検出されなかった。

第10図　川崎山遺跡ｒ地点・北裏畑遺跡ｅ地点位置図



第11図　川崎山遺跡ｒ地点トレンチ実測図

第12図　川崎山遺跡ｒ地点出土遺物

第３表　川崎山遺跡ｒ地点出土遺物

No.	出土地点	器形	部位・状態	計測値（mm）	○粘土／石材　●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	ATトレンチ	深鉢	胴部 小片	—	○雲母　角砂 ●橙褐色	内）ナデ。 外）斜方向ナデ。指痕あり。	縄文土器 前期か

本遺跡に関する調査報告書

八千代市遺跡調査会（1980年）『萱田町川崎山遺跡』（ａ地点）

八千代市教育委員会（1992年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成３年度』（ｂ地点確認調査）

八千代市教育委員会（1994年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成５年度』（ｃ地点確認調査）

八千代市教育委員会（1998年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成９年度』（ｄ地点確認調査，ｅ地点確認・本調査）

八千代市教育委員会（1999年ａ）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成10年度』（ｆ地点確認調査）

八千代市川崎山遺跡調査会（1999年）『千葉県八千代市川崎山遺跡―埋蔵文化財発掘調査報告書―』（ｃ地点本調査）

八千代市教育委員会（1999年ｂ）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成11年度』（ｇ地点確認・本調査）

八千代市教育委員会（2000年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成12年度』（ｈ地点・ｉ地点確認調査）

八千代市教育委員会（2002年）『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書１』（ｂ地点本調査）

八千代市教育委員会（2003年）『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書』（ｊ地点確認・本調査）

八千代市遺跡調査会（2003年）『千葉県八千代市川崎山遺跡ｄ地点―萱田町川崎山土地区画整理事業に先行する埋蔵文化財発掘調査報告書―』（ｄ地点本調査）

八千代市遺跡調査会（2004年）『千葉県八千代市川崎山遺跡ｈ地点―店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書―』（ｈ地点本調査）

八千代市遺跡調査会（2006年）『千葉県八千代市川崎山遺跡ｋ地点―宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』（ｋ地点本調査）

八千代市教育委員会（2008年ａ）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成19年度』（ｌ地点確認調査）

八千代市教育委員会（2008年ｂ）『千葉県八千代市逆水遺跡ｆ地点ほか―不特定遺跡発掘調査報告書Ⅴ―』（ｋ地点確認調査）

八千代市教育委員会（2008年ｃ）『千葉県八千代市川崎山遺跡ｍ地点発掘調査報告書』（ｍ地点本調査）

八千代市教育委員会（2008年ｄ）『千葉県八千代市川崎山遺跡ｎ地点発掘調査報告書―宅地開発事業に先行する埋蔵文化財

図版４　川崎山遺跡ｒ地点

（１）調査状況

（２）AT掘削状況

（３）AT北西壁土層断面

（４）AT北東壁土層断面

（５）出土遺物

発掘調査―」（ｎ地点本調査）
八千代市教育委員会（2008年ｅ）「千葉県八千代市川崎山遺跡―ｆ地点埋蔵文化財発掘調査報告書―」（ｆ地点本調査）
八千代市教育委員会（2009年）「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成20年度」（ｎ地点確認調査）
八千代市教育委員会（2010年）「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成21年度」（ｏ地点確認調査）
八千代市教育委員会（2013年）「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成24年度」（ｐ地点・ｑ地点確認調査）

5．内野南遺跡ｆ地点

遺跡の立地と概要

内野南遺跡は，市域西部，桑納川から南に入る花輪谷津と石神谷津に挟まれた台地上に所在する。これまでに５地点で調査を実施し，縄文時代，奈良時代の遺構・遺物等が検出されている。

今回のｆ地点は，遺跡の北部～西部に位置し，ｃ地点に隣接する標高22.5ｍ～26.2ｍの山林である。周囲の開発が進んでいるため旧地形が見えにくくなっているが，ｆ地点の中央は低くなるなど起伏がある。これは花輪谷津から入る谷の影響で，ｆ地点を通ってｃ地点に達していたらしい。

調査の方法と経過

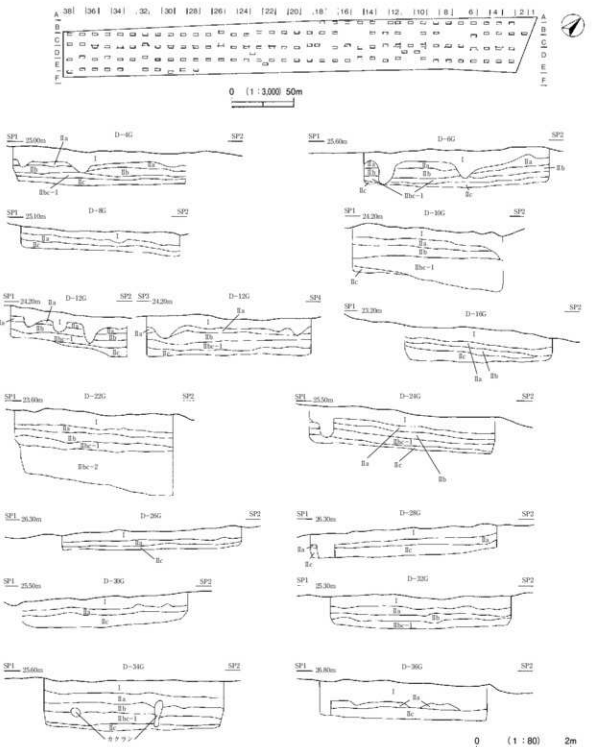
調査区を形状に合わせて10ｍごとに区画し，アルファベットと数字の組合せで大グリッドを表現し，さらにこれを５ｍごとに４つの小グリッドに分け，１～４の枝番号を付けた。２ｍ×４ｍのトレンチを大グリッドに１箇所を原則として配置し，合計133箇所1,064㎡分を設定した。これらを人力及び重機で掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は，平成24年７月５日から８月８日で，７月５日機材搬入。５日～17日杭設置，下草刈り。11日～18日トレンチ設定，12日～23日人力による掘削，12日～25日重機による掘削，18日～８月７日トレンチ内精査。７月26日～８月７日土層調査，実測記録作業。７月31日～８月７日重機による埋め戻し。８日機材を撤収し，調査を終了した。

調査の概要

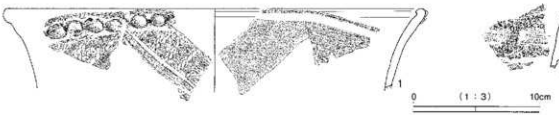
土層は，主にＤグリッドの列に観察面を設定し記録した。基本的に，Ⅰ層（表土），Ⅱａ層（黒褐色土，腐植土層），Ⅱｂ層（暗黄褐色土，新期富士テフラ層），Ⅱｂｃ-1層（暗褐色土），Ⅱｃ層（黄褐色土，ローム漸移層）を確認し，Ｄ-22ＧのみにⅡｂｃ-2層（黒色土，可塑性強い，谷に堆積した土）を確認した。調査区北

第13図　内野南遺跡ｆ地点・ｇ地点位置図



第14図　内野南遺跡ｆ地点トレンチ実測図

東部から南西部に向かって見て行くと，D-4G北西壁では，地表面の標高が24.7m～24.9m，Ⅱc層下面の標高が24.1m前後で，Ⅰ層，Ⅱａ層，Ⅱb層，Ⅱｂｃ-1層，Ⅱc層を確認した。D-6G南東壁では地表面の標高が25.4m前後，Ⅱc層下面の標高が24.6m前後と高くなり，D-8G南東壁では地表面の標高が24.7m～24.9m，Ⅱc層下面の標高が24.3m～24.5mで，南西に向かって低くなる。ここでは，Ⅱb層，Ⅱｂｃ-1層は検出されなかった。D-10G北東壁では地表面の標高が23.8m～24.0m，Ⅱc層は一部で検出され下面の標高は23.0m前後であ



第15図　内野南遺跡ｆ地点出土遺物

第４表　内野南遺跡ｆ地点出土遺物

No.	出土地点	器形	部位・状態	計測値（mm）	○粘土・石材　●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	D-14	深鉢	口縁部 ２点接合	復元口径324 残存高64	○雲母 ●内）橙褐色　外）褐色	内）沈線１条，横方向ミガキ。 外）縦縄文，地文は粗い縄文Ｌ又か，斜方向沈線。	縄文土器　後期 加曽利B式相当
2	E-20G	深鉢	胴上部 摩耗	—	○雲母，繊維 ●内）橙褐色　外）浅褐色，灰色	内）ナデ。 外）Ｌ Ｌ帯縄文２段，沈線。縦長の瘤文（の痕跡か）。	縄文土器　後期 安行Ⅰ式相当

るが，Ⅱｂｃ-1層が厚さ0.2m～0.7mと南東に向かって厚さを増し，Ⅱｃ層を捉えることができなかった。谷地形と考えられる。D-12G・14G南東壁では地表面の標高が23.8m～23.9m，Ⅱｃ層下面の標高が23.0m～23.1m，D-16G南東壁では地表面の標高が22.6m～23.1m，Ⅱｃ層下面の標高が22.2m前後と低くなり，Ⅱｂ層が南西側で途切れ，Ⅱｂｃ-1層は検出されなかった。D-22G北西壁では，地表面の標高が23.2m～23.4m，Ⅱｃ層は検出されず，Ⅱｂｃ-1層の下にⅡｂｃ-2層が厚さ0.6m～0.9m堆積していた。Ⅱｂｃ-2層が検出されたのはこのトレンチのみである。谷地形と考えられる。D-24G北西壁では，地表面の標高が24.9m～25.4m，Ⅱｃ層下面の標高が24.4m～24.6m，D-26G南東壁では地表面の標高が25.9m～26.1m，Ⅱｃ層下面の標高が25.7m前後で，D-24G・26Gともに南西に向かって高くなっている。D-28G北西壁では，地表面の標高が25.9m～26.1m，Ⅱｃ層下面の標高が25.5m～25.7m，D-30G北西壁では地表面の標高が25.1m～25.4m，Ⅱｃ層下面の標高が24.6m～24.7mで，D-28G・30Gともに南西に向かって低くなっている。またD-26G・28G・30Gでは，Ⅱｂ層・Ⅱｂｃ-1層は検出されなかった。D-32G南東壁では地表面の標高が25.1m前後，Ⅱｃ層上面の標高が24.4m～24.5m，D-34G南東壁では地表面の標高が25.4m前後，Ⅱｃ層下面の標高が24.4m前後である。D-36G北西壁では地表面の標高が26.3m～26.6m，Ⅱｃ層下面の標高が25.8m前後と高くなる。ここではⅠ層が0.4～0.5mとやや厚く，Ⅱｂ層・Ⅱｂｃ-1層は検出されなかった。

遺構は，検出されなかった。遺物は，縄文土器５点，剥片５点（チャート・黒色安山岩等），焼礫３点，高師小僧３点合計16点が出土した。うち縄文土器２点を図示した。

調査のまとめ

比較的良好な土層を確認した。遺物は，縄文土器等を検出したが，分布は疎であった。遺構は検出されなかった。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会（1999年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成10年度』（ｂ地点）

八千代市遺跡調査会（2000年）『千葉県八千代市内野南遺跡ａ地点発掘調査報告書』（ａ地点）

八千代市教育委員会（2004年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成15年度』（ｃ地点）

八千代市教育委員会（2008年）『千葉県八千代市内野南遺跡ｄ地点発掘調査報告書―集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査―』（ｄ地点本調査）

八千代市教育委員会（2009年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成20年度』（ｄ地点確認調査）

八千代市教育委員会（2012年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成23年度』（ｅ地点）

図版５　内野南遺跡ｆ地点

（１）調査状況－１－

（２）調査状況－２－

（３）D-4G北西壁土層断面

（４）D-10G北東壁土層断面

（５）D-28G北西壁土層断面

（６）D-36G北西壁土層断面

（７）出土遺物（番号は第15図と同じ）

6．内野南遺跡ｇ地点

遺跡の立地と概要

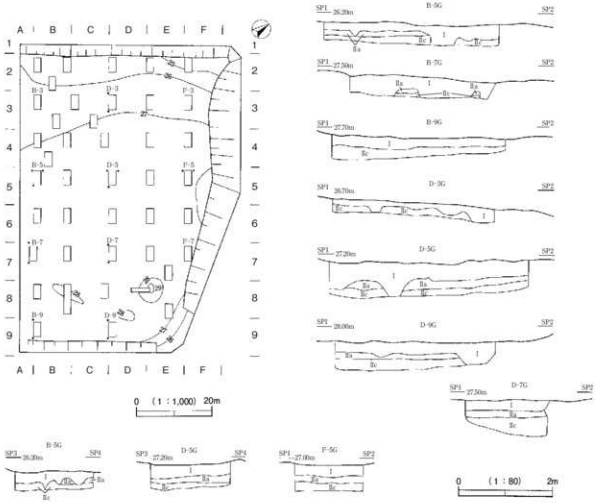
遺跡の立地は，前項を参照されたい。

ｇ地点は，遺跡中央の北東寄りに位置する。標高25m～27mの山林である。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて10mごとに区画し，アルファベットと数字の組合せで大グリッドを表現し，さらにこれを５mごとに４つの小グリッドに分け，１～４の枝番号を付けた。２m×４mのトレンチを大グリッドに１箇所を原則として配置し，調査区西部に若干増設し，調査区南部に塚状・土塁状の高まりがあるため，それらを調べるためのトレンチを含め，合計42箇所341㎡分設定した。これらを人力及び重機で掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は，平成24年８月10日から29日で，10日環境整備，杭設置。16日杭打ち，トレンチ設定。16日～21日人力による掘削。17日～28日土層調査，実測記録。21日～23日重機による掘削，21日～28日トレンチ内精査。28日・29日重機による埋め戻し，機材を撤収し，調査を終了した。



第16図　内野南遺跡ｇ地点トレンチ実測図

調査の概要

土層観察面は，主にB列とD列に設定した。Ⅰ層（表土，暗褐色土，しまり弱い），Ⅱa層（黒褐色土，Ⅰ層に似るが黒色味強く，しまり弱いがⅠ層よりはしまる），Ⅱc層（褐色土，ローム漸移層）を確認した。全体的に東～南が高く，西～北に向かって低くなっている。B-3Gでは，地表面の標高が26.0m～26.3m，Ⅱc層下面の標高が25.5m前後。D-3Gでは，地表面の標高が26.2m～26.6m，Ⅱc層下面の標高が26.0m～26.2m。B-5Gでは，地表面の標高が25.9m～26.0m，Ⅱc層下面の標高が25.5m～25.6m。D-5Gでは，地表面の標高が27.0m～27.1m，Ⅱc層下面の標高が26.3m～26.5m。B-7Gでは，地表面の標高が27.1m～27.4m，Ⅱc層下面の標高が26.8m～26.9m。D-7Gでは，地表面の標高が27.3m，Ⅱc層下面の標高が26.6m～26.8m。B-9Gでは，地表面の標高が27.5m～27.6m，Ⅱc層下面の標高が27.0m～27.1m。D-9Gでは，地表面の標高が27.7m～27.8m，Ⅱc層下面の標高が27.1m～27.2mである。

塚状・土塁状の高まりは，ビニールゴミ等を含むもので，現代の盛土と判断した。遺構は検出されなかった。遺物は，F-3Gから焼礫２点が出土した。本遺跡のこれまでの調査結果を勘案し，縄文時代のものと判断した。他に土師器１点を地表面で採集した。

調査のまとめ

縄文時代の焼礫２点が出土した。塚状･土塁状の高まりは，現代の盛土と判断した。遺構は検出されなかった。

図版６　内野南遺跡ｇ地点

（１）調査状況

（２）C-8G調査状況

（３）F-5G北西壁土層断面

（４）B-3G南西壁土層断面

7．小板橋遺跡ｆ地点

遺跡の立地と概要

小板橋遺跡は，市域の南部，新川低地を東に臨む台地上にあり，標高は24m以下である。

小板橋遺跡については，過去の調査結果から，石製模造品の工房跡を含む古墳時代中・後期の集落跡であり，権現後遺跡・北海道遺跡・川崎山遺跡とともに，新川西岸の石製模造品の工房群の一角を担う集団の遺跡と捉えることができる。さらに，ｄ地点では，地下式坑を初めとする中・近世の遺構・遺物が検出され，近世に栄えた大和田宿の成立前史に関わる遺跡であることも明らかとなった。

ｆ地点は，遺跡南部の標高23.5m前後の地点である。

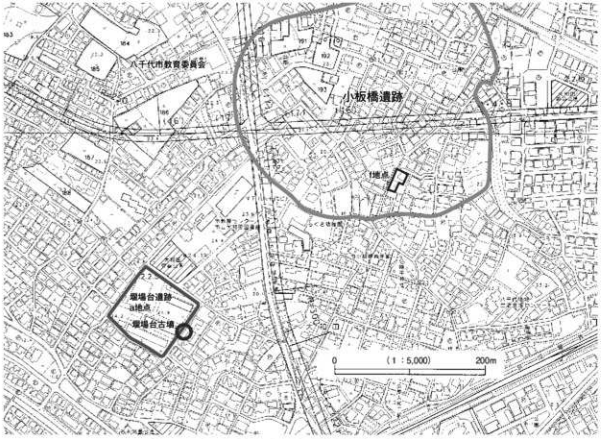
調査の方法と経過

調査区の形状に合わせ，２ｍ×５のトレンチを３箇所，合計30㎡分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

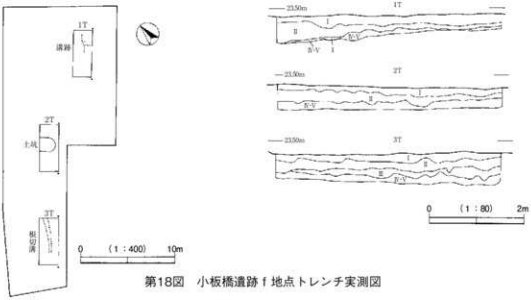
調査期間は，平成24年９月４日から10日で，４日機材搬入，杭設置，トレンチ設定。５日重機による掘削，トレンチ内精査。５日･７日土層調査，実測記録。10日重機による埋め戻し，機材を撤収し，調査を終了した。

調査の概要

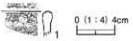
土層は，各トレンチの南東壁を観察した。基本的にⅠ層（表土，7.5YR３／４暗褐色土，しまり弱く，可塑性も弱い），Ⅱ層（7.5YR３／３暗褐色土，しまり良いが，可塑性は弱い。径１～３㎜の黄色スコリアを多量含む。１Ｔ･３Ｔでは１～３㎜の焼土粒子を含み，２Ｔでは20～50㎜のロームブロックを含む），Ⅲ層（ソ



第17図　小板橋遺跡ｆ地点・環境台遺跡ａ地点位置図



第18図　小板橋遺跡ｆ地点トレンチ実測図



第19図　小板橋遺跡ｆ地点出土遺物

第５表　小板橋遺跡ｆ地点出土遺物

No	出土地点	器形	部位・状態	法量値（mm）	○粘土／石材　●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	３Ｔ	鉢か	口縁部 小片	残存高27	○雲母，赤褐色粒子 ●内）淡橙色　外）褐色	口唇上に段と沒みが巡る。内）横方向ナデ痕調者。 外）横方向ナデ痕調者。	近世　素焼土器

フトローム，7.5YR４/４褐色土，３Ｔのみで検出），Ⅳ・Ⅴ層（ハードローム，7.5YR４/４褐色土，赤色・黒色・灰色スコリア及び火山ガラスを含む），１（7.5YR４/３褐色土，しまり良いが，可塑性は弱い。１Ｔで検出された溝跡の覆土）であった。基本層序の多くは失われ，Ⅰ層の下にはⅡ層暗褐色土が厚さ0.1m～0.4m堆積し，その下は３Ｔではソフトロームが認められたが，１Ｔ・２Ｔではハードロームに達していた。本遺跡ｄ地点ではⅡ層暗褐色土・黒褐色土層群が認められたが，本地点も似た在り方と考えられる。地表面の標高は，23.3m前後，ソフトロームは22.7m～23.0m，ハードロームは概ね22.9m以下であるが，１Ｔ側が高く３Ｔ側が低くなっている。

遺構は，２Ｔにおいて短軸1.45m×長軸検出部分1.6mの土坑を検出した。形状や覆土の在り方から，遺物は無いが縄文時代の陥穴と判断した。１Ｔでは溝跡が検出された。硬化面を伴っており埋没の過程で道路として使われたらしい。半分は撹乱されていた。近世・近代の溝跡と判断した。３Ｔからもほぼ同じ時代と考えられる根切溝跡を検出した。

遺物は，３Ｔにおいて土器片１点が出土した。近世の素焼土器と判断した。

調査のまとめ

遺構としては，縄文時代の陥穴１基と近世･近代の溝跡１条を検出した。遺物は近世の素焼土器１点であった。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市遺跡調査会（2008年）『千葉県八千代市小板橋遺跡―ｂ地点埋蔵文化財発掘調査報告書―』

八千代市教育委員会（2013年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成24年度』（ｄ地点確認調査）

八千代市教育委員会（2013年）『千葉県八千代市小板橋遺跡ｄ地点―宅地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告書―平成24年度』（ｄ地点本調査）

図版７　小板橋遺跡ｆ地点

（１）調査状況

（２）1T土層断面

（３）2T土層断面

（４）3T土層断面

（５）2T遺構検出状況

（６）出土遺物

８．持田遺跡ｄ地点

遺跡の立地と概要

持田遺跡は，市域の中央やや南寄り，新川東岸の村上地区の台地上にある。西側は新川，北側は相女谷津によって画された台地上が遺跡で，標高は24m～26mである。本遺跡と交わるように中世の正覚院館跡が存在する。これまでの調査では，古墳時代後期の集落跡，常滑産骨蔵器，銅製香炉等が検出されている。今回の地点は，遺跡の南端付近で東側が高く１m～２mの段差があって西側に向かって低くなる。宅地及び畑地であり，地形は若干改変されているように見受けられた。正覚院館跡にも近く，関連が想定される地点である。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて10m四方のグリッドで区画し，アルファベットと数字の組合せで大グリッドを表現し，さらにこれを５mごとに４つの小グリッドに分け，１～４の枝番号を付けた。２m×４m等のトレンチを13箇所，合計100㎡分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

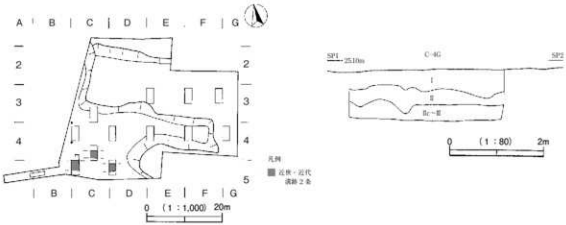
調査期間は，平成24年９月６日から９月18日で，６日機材搬入，杭設置，トレンチ設定。６日～10日人力による掘削。10日・11日重機による掘削，土層調査，実測記録。11日～13日トレンチ内精査。14日・18日重機による埋め戻し，機材を撤収し，調査を終了した。

調査の概要

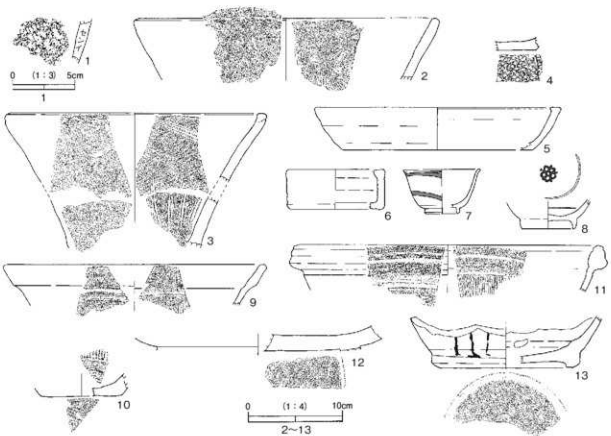
土層の観察は，調査区西端のC-4G西壁で行った。Ⅰ層（表土，褐色土，硬くしまりあり），Ⅱ層（暗褐色土，黒色土・黄色スコリアを含む。しまり弱く，可塑性なし），Ⅱc～Ⅲ層（暗黄褐色土，ローム漸移層～ソフトローム，しまりややあり，可塑性弱い）が認められた。基本層序はほとんど見られず，この他のトレンチは攪乱が多かった。

遺構は，調査区南西端で溝跡が検出された。C-4-4Gの溝跡とC-5GとD-5Gを通る溝跡合計２条である。

第20図　持田遺跡ｄ地点位置図



第21図　持田遺跡ｄ地点トレンチ実測図



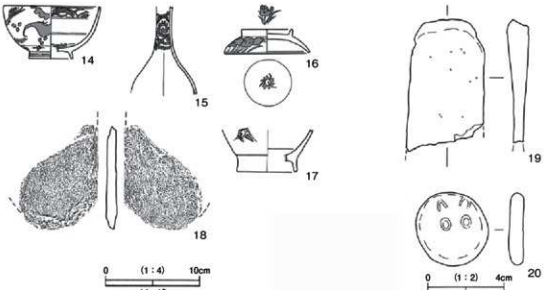
第22図　持田遺跡ｄ地点出土遺物（１）

出土遺物や覆土の状態から近世～近代の溝跡と判断した。

遺物は，陶器58点，磁器41点，瓦質土器16点，素焼土器11点，ガラス製品５点，焼礫４点，須恵器・鉄製品・緑泥片岩・礫片各２点，その他縄文土器・土師器・陶製瓦・砥石・小礫・中礫・巨礫各１点，合計150点が出土した。うち80％以上の121点はＣ-４Ｇから出土した。近世～近代の陶磁器等の遺物が中心と考えるが，一部中世に遡る土器もありそうである。20点を抽出して図示した（第22・23図・第６表）。

調査のまとめ

遺構は，近世～近代の溝跡２条を確認した。遺物は近世～近代の陶磁器を主体としていた。一部に中世の遺物が検出され，正覚院館跡の周辺遺跡と捉えることもできる。



第23図　持田遺跡ｄ地点出土遺物（２）

第６表　持田遺跡ｄ地点出土遺物

№	出土地点	器形	部位・状態	計測値（mm）	○胎土　右材　●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	D-5G	深鉢	胴部 小片	—	○繊維、雲砂 ●内）淡褐色　外）褐色　断口）黒色	内）ナデ。 外）縄文、不明瞭。	縄文土器 前期黒浜式か
2	C-4G	すり鉢	口縁部	復元口径325 残存高35	○雲砂、雲砂 ●黒褐色	内）横～斜方向ナデ。すり目の端部が見える。 外）ナデ。	瓦質土器
3	D-5G	すり鉢 3点	口縁部２点 底部付近１点	復元口径276　復元底径 140　残存高142	○雲砂 ●灰黒色、灰褐色	内）ナデ。すり目２～３本単位でまばら。口縁付近にも斜方向に入る。外）ナデ。口縁付近に輪積痕。	瓦質土器
4	C-4G	火鉢	底部	残存47×34 厚９	○赤褐色粒子 ●黒褐色　断口）淡灰赤色、芯は黒色	内）ナデ。 外）網転印刷の格子文。	瓦質土器
5	D-5G	内耳鍋か	口縁～底部	復元口径260　復元底径 202　高45	○雲砂・繊維多、雲母、石英、長石 ●内）褐色　外）暗褐色、黒色	内）横方向ナデ。口縁部内側に肥厚する。 外）横方向ナデ。ロクロ目は不明瞭。	素焼土器
6	C-4G	器台か	口縁付近～ 底部　約１/４	復元底径100　高42	○雲砂、雲母、赤褐色粒子、長石繊維 ●内）灰色、灰褐色　外）淡褐色、橙色	内）横方向ナデ痕跡著。 外）横方向ナデ。	素焼土器
7	C-4G	椀	口縁～底部 高台付１/４弱	復元口径82 復元高台径38　高47	○雲砂 ●淡灰色（施釉）	内）底面に支様の端部が見える。 外）横方向の青色線３条。口縁上）暗褐色	陶器
8	C-4G	鉢か	底部 高台付	復元高台径56 残存高31	○雲砂 ●灰白色（施釉）	内）染付、底面に輪花文か。器面にひび・穴あり。 高台端部が所々欠損。	陶器
9	C-4G	すり鉢	口縁部	復元口径276 残存高24	○石英繊維少 ●褐色・淡褐色（施釉）　断口）白色	内）横方向ナデ。段、すり目の端部が見える。 外）口唇肥厚、横方向ナデ。	陶器 10に似る
10	D-5G	すり鉢	底部	復元底径86 残存高24	○繊維 ●褐色（施釉）　断口）白色	内）すり目間隔２ミリ。 外）ナデ。	陶器 ９に似る
11	C-4G	すり鉢	口縁部	復元口径314 残存高50	○砂粒、石英繊維 ●暗褐色（施釉）	内）口唇付近に沈線。すり目間隔３ミリ。 外）口唇肥厚、沈線状に２段所がくぼむ。	陶器 亜厚なつくり
13	C3-4G	甕	底部 高台付	復元高台径216 残存高27	○石英繊維 ●内）淡緑色（施釉）　底外）白色	内）褐色の文様の端部が見える。 外）高台～底面は無釉。体部は内面と似た輪薬。	陶器 亜厚なつくり
14	C-4G	椀	口縁～底部 高台付１/４弱	復元高台径158 残存高55	○繊維　●内）褐色（施釉） 外）褐色（施釉）　底外）灰白色	内）重ね焼き焼きの痕跡２箇所。 外）高台～底面は無釉。	陶器
15	C-4G	鶴首瓶	頸上～ 胴上部	復元口径102 最大径70　残存高92	○繊密 ●内）橙白色　外）白色（施釉）	内）横方向ナデ。 外）染付無部に細密草文。胴部にも文様端部見える。	磁器
16	C-4G	蓋	縁の一部欠損 つまみ径54	口径90 高25	○繊密 ●青白色（施釉）	内）染付、花文か付文。 外）染付、花・葉文。	磁器
17	C-4G	鉢か	底部 高台付	復元高台径64 残存高46	○繊密だが繊維が見える ●淡青灰色（施釉）	内）染付、縁１条、底面に文様の端部が見える。 外）染付、植物文の一部が見える。縁２条。	磁器
18	D-5G	板碑片か	基部か	185×80 厚９～12	○緑泥片岩 ●青灰色	一辺が直線に整形されている。 図の左の面は平滑、右の面はやや凹凸がある。	
19	C-4G	砥石		69×41 厚５～11	○繊密なれ。流紋岩か。 ●灰褐色　一部赤色味。	使い込まれて薄くなっている。 主に表裏２面を使用している。	
20	C-4G	おはじき	完形	39×39 厚7.5	○ガラス、内部に細かい気泡あり。 ●黄～緑～茶色味を帯びる	平面な面とやや丸味を帯びる面があり、前者の面には細い引っかき沈線があり、後者の面には不整・楕円形の凸部がある。	

本遺跡に関する調査報告書等

八千代市教育委員会（1995年）『平成６年度八千代市埋蔵文化財調査年報』（ａ地点）

八千代市教育委員会（2005年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成16年度』（ｃ地点）

八千代市教育委員会（2006年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成17年度』（ｃ地点その２）

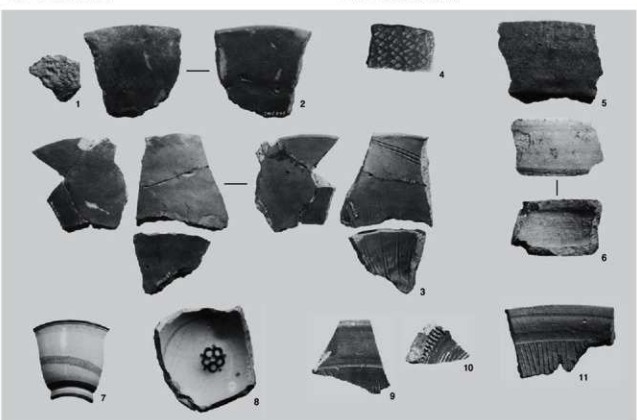
図版８　持田遺跡ｄ地点（１）

（１）調査状況－１－

（２）調査状況－２－

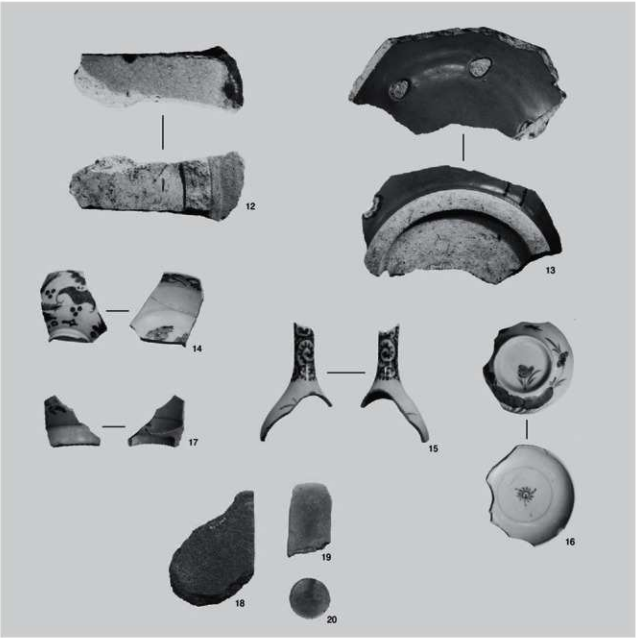
（３）C-4G土層断面

（４）C-4-4G完掘状況



（５）出土遺物－１－（番号は第22図と同じ）

図版９　持田遺跡ｄ地点（２）



（６）出土遺物－２－（番号は第22図・第23図と同じ）

9．新東原遺跡ｋ地点

遺跡の立地と概要

新東原遺跡は，市域南東部，佐倉市との市境付近に所在する。新川の上流に当たる勝田川を南～南西に臨む台地上及び一部低台地が遺跡範囲である。

本遺跡においては，これまでに10地点で調査が行われ，旧石器時代の遺物，縄文時代前期・後期の遺構・遺物，奈良・平安時代の方形周溝状遺構，さらに旧陸軍の射撃演習に伴うと推測される砲弾の一部などが検出されている。今回の地点は，ｃ地点・ｉ地点に隣接する標高16m～19m，南西が高く北東に向かって低くなる斜面地の山林である。

調査の方法と経過

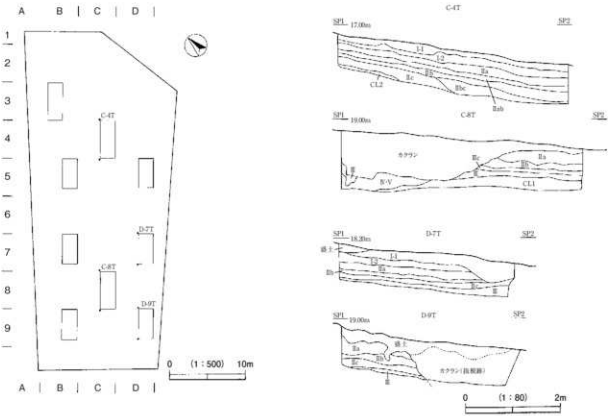
調査区を形状に合わせて５m四方に区画し，アルファベットと数字の組合せでトレンチ名を表現した。２m×３～４mのトレンチを９箇所，合計78㎡分設定し，人力及び重機でこれらを掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は，平成24年11月７日から11月15日で，７日機材搬入，草刈り。８日杭設置，トレンチ設定。９日重機による掘削，トレンチ内精査。12日・13日土層調査，実測記録。15日重機による埋め戻し，機材を撤収し，調査を終了した。

調査の概要

土層観察はトレンチの北西壁で行った。Ⅰ-1層（表土，7.5YR３／３暗褐色土，しまり・可塑性ともになし），Ⅰ-2層（旧表土か，7.5YR３／３暗褐色土，しまり・可塑性ともに弱い），Ⅱa層（7.5YR３／２黒褐色土，腐植土層，しまり・可塑性ともに弱い。径0.5～２㎜の黄色スコリアを含む），Ⅱb層（7.5YR３／３暗褐色土，褐

第24図　新東原遺跡ｋ地点・Ｉ（エル）地点位置図



第25図　新東原遺跡ｋ地点トレンチ実測図

色土が斑状に入る，新期富士テフラ層），Ⅱc層（7.5YR４／３褐色土，ローム漸移層），Ⅲ層（7.5YR４／４褐色土，ソフトローム），Ⅳ・Ⅴ層（7.5YR４／６褐色土，ハードローム，径１㎜の褐色・黒色・灰色スコリアを多量含む）という比較的良好な基本層序を確認した。D-9T・C-8Tには抜根跡と考えられる大規模な撹乱があった。斜面下方に当たるC-4Tには，Ⅱａｂ層（7.5YR２／２・３／２黒褐色土，褐色土が斑状に入る），Ⅱｂｃ層（7.5YR３／３暗褐色土，褐色土が斑状に入る，谷に堆積する土と考えられる）を認識した。特徴的なのは粘土層の存在であった。C-8Tの最下層はⅢ層及びⅣ・Ⅴ層の下，標高17.8m以下に粘土層CL１（7.5YR５／３にぶい褐色の粘土）があり，C-4TではⅡc層の下，標高15.8～16.2mに砂を含む粘土層CL２（7.5YR５／６明褐色の粘土，褐色土が雲状に入る）が検出された。標準層序における粘土質の土は，Ⅺ層武蔵野ローム（粘土質の灰褐色ローム）であり，この層はⅢ層から約1.5m以上の深さにある。今回の調査の粘土層はⅪ層とは異なるものかもしれないが，標準層序とは明らかに異なる様相を示している。

遺構・遺物とも検出されなかった。

調査のまとめ

遺構・遺物は検出されなかった。土層の観察所見として，粘土層の在り方が標準層序とは異なっていることが特筆される。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会（2003年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成14年度』（ａ地点確認調査）

八千代市遺跡調査会（2004年）『千葉県八千代市新東原遺跡ａ地点発掘調査報告書―宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査―』（ａ地点本調査）

図版10　新東原遺跡ｋ地点

（1）調査状況

（2）C-4T土層断面

（3）C-8T土層断面

（4）D-7T土層断面

（5）D-9T土層断面

八千代市教育委員会（2004年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成15年度』（b地点、c地点）
八千代市教育委員会（2005年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成16年度』（d地点）
八千代市教育委員会（2006年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成17年度』（e地点、f地点）
八千代市教育委員会（2007年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成18年度』（g地点）
八千代市教育委員会（2008年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成19年度』（h地点）
八千代市教育委員会（2010年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成21年度』（i地点）
八千代市教育委員会（2011年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成22年度』（j地点）

10．堀場台遺跡ａ地点

遺跡の立地と概要

堀場台遺跡は，市域の南部，高津川を南に臨む台地上に所在する。

本遺跡は，Ⅰ章に記したように，堀場台古墳として箱式石棺１基が発見・調査された住宅に隣接しているため，試掘を実施したところ，同古墳の周溝のみでなく，竪穴住居跡を検出したことによって，同古墳及び新たな遺跡として周知することになったものである。標高24m前後の社宅跡地で，鉄筋コンクリート造り建物３棟や遊具・テニスコートなどが設置されていた。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて10mごとに区画し，アルファベットと数字の組合せで大グリッドを表現し，さらにこれを５mごとに４つの小グリッドに分け，１～４の枝番号を付けた。２m×５mのトレンチを大グリッドに１箇所を原則として配置し，適宜長さを変えるなど調整し合計729㎡分を設定した。これらを人力及び重機で掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は，平成24年12月26日から平成25年１月21日で，12月26日機材搬入，環境整備，杭設置，トレンチ設定。27日トレンチ設定，人力による掘削。１月７日～10日人力による掘削，重機による掘削，土層調査，実測記録。７日～17日トレンチ内精査。18日トレンチを追加設定，掘削，精査。16日～21日重機による埋め戻し，機材を撤収し，調査を終了した。

調査の概要

土層の観察所見としては，Ⅰ-1層（表土，黒色土とロームが粗く混じり合う），Ⅰ-2層（旧表土，暗褐色土，しまりが弱い），Ⅱb層（暗褐色土，褐色土を斑状に含む，新期富士テフラ層），Ⅱc層（褐色土，ローム漸移層）が認められたが，撹乱が多く，土層の状態は全般に不良であった。しかし，地表下0.6m～0.9mの深さで遺構を検出した。D-10Gの遺構覆土１は暗褐色土でロームを少量含み，しまり強く可塑性は無かった。古墳時代の小型の竪穴住居跡と判断した。堀場台古墳の周溝を検出するために任意に設定したAトレンチで，予想通り周溝と見られる溝跡を検出した。覆土２は黒褐色土，ロームを微量含み，しまり・可塑性ともに弱い。遺構確認面の標高は23.2m～23.5mであった。

縄文時代の竪穴住居跡１軒，陥穴１基，土坑４基，古墳時代の竪穴住居跡３軒，古墳周溝１条を確認した。

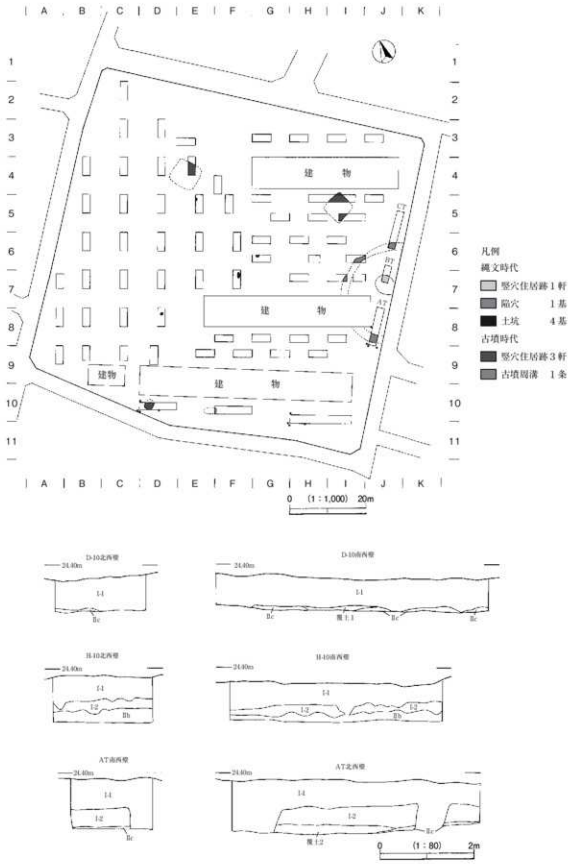
遺物は，40点出土した。内訳は土師器30点，縄文土器４点，礫片３点，剥片１点等である。他に地表面採集品が３点である。これらから７点を抽出し図示した。

調査のまとめ

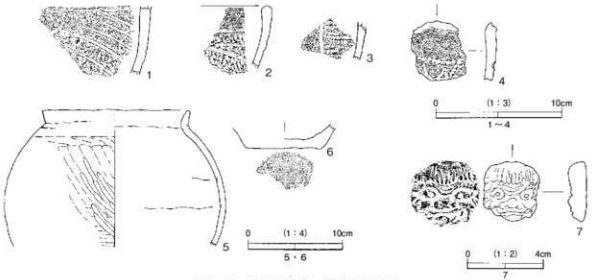
撹乱は激しかったが，遺構として竪穴住居跡や堀場台古墳の周溝等を検出し，遺物として縄文土器や古墳時代の土師器を確認することができた。

本遺跡に関する文献

八千代市教育委員会（2002年）『千葉県八千代市市内出土人骨分析委託報告書』（堀場台古墳）



第26図　堰場台遺跡ａ地点トレンチ実測図



第27図　堰場台遺跡ａ地点出土遺物

第７表　堰場台遺跡ａ地点出土遺物

No.	出土地点	器形	部位・状態	計測値（mm）	○砂土／石材　●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	B	深鉢	胴上部	—	○細砂、粗砂 ●内）灰褐色　外）淡褐色、淡橙褐色	内）横方向ミガキ。外）地文は細い縄文か、不明瞭。 斜方向条痕、横方向沈線も見える。焼成粘土貼付者。	縄文土器　後期 加曽利B式類製
2	B	鉢か深鉢	口縁部	—	○細砂 ●褐色	内）横方向ミガキ。外）口縁部に無文帯、横方向沈線の下の地文は押引文か、横・斜方向の沈線。	縄文土器　後期 加曽利B式類製
3	B	深鉢か	胴部	—	○粗砂、細礫 ●内）暗褐色　外）黒褐色	内）横・斜方向ミガキ。 外）上位磨消縄文、縦方向沈線、無文部ミガキ。	縄文土器　後期 中葉～後葉類製
4	H-10G	土器片錘	胴上部 屈曲部	47×39　厚7～9	○粗砂、細礫、雲母 ●内）灰褐色　外）暗褐色	内）横方向ナデ、外）押引文。 決り は２箇所明瞭。側口は研磨されてない。	縄文土器　中期 阿玉台式
5	I-5-4G	壺 胴部破形	口縁～ 胴下部	復元口径156　復元胴部 最大径234　残存高145	○粗砂多　●内）暗褐色、橙褐色 外）暗褐色、橙褐色、褐色	内）横方向ナデ、輪積痕、肌荒れ。 外）横方向ナデ、横・斜方向へラ削り・ミガキ。	土師器
6	I-5-4G	甕	底部	復元底径76 残存高27	○粗砂、細礫 ●内）黒褐色　外）褐色、暗褐色	内）ナデ、凹凸あり。 外）ナデ　底外）ヘラ削り。	土師器
7	表採	泥面子 型抜き	完形	31×29　厚7～9.5	○微密 ●表）淡褐色、淡橙色　裏）淡橙色	表）扁面。丸か。 裏）ゆるやかな凹凸あり。指紋あり。	

図版11　堰場台遺跡ａ地点（１）

（１）調査状況－１－

（２）調査状況－２－

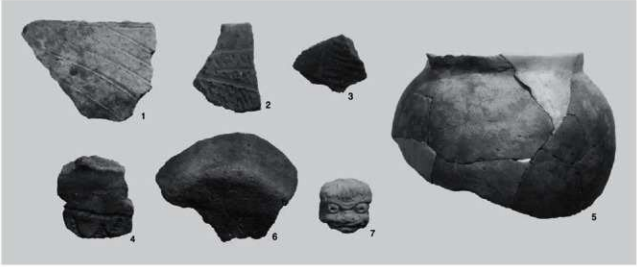
図版12　堰場台遺跡ａ地点（２）

（３）H-10G土層断面

（４）AT遺構検出状況

（５）D-10G遺構検出状況

（６）E-4-3G遺構検出状況



（７）出土遺物（番号は第27図と同じ）

11．北裏畑遺跡ｅ地点

遺跡の立地と概要

北裏畑遺跡は，市域の南部，国道296号線（成田街道）の北側に存在し，新川西岸の台地上，標高20～25ｍに立地する。遺跡の南部は近世に栄えた大和田宿の付近に当たる。遺跡中央西寄りのａ地点では，近世以降の遺物が出土し，その南に隣接するｃ地点では近世の土坑を検出した。遺跡南東部のｂ地点では，縄文時代陥穴１基，近世土坑３基，溝状遺構２条を検出した。遺跡北部のｄ地点では，縄文時代の陥穴を１基検出し，石鏃・泥面子を採集した。

今回の地点は，ｄ地点の西方，川崎山遺跡との境界に当たる標高23～24ｍの台地上平坦面である。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて５ｍ四方に区画し，アルファベットと数字の組合せでトレンチ名を表現した。２ｍ×４～５ｍのトレンチを５箇所，合計44㎡分設定し，人力及び重機でこれらを掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は，平成25年１月18日から25日で，18日機材搬入，杭設置，トレンチ設定，21日重機による掘削，トレンチ内精査。21日・22日土層調査，実測記録。25日重機による埋め戻し，機材を撤収し，調査を終了した。

調査の概要

調査区は平坦であるが，西に向かって若干低くなる地形で，東側のＣ-5Ｔの地表面の標高は24.2ｍ～24.3ｍ，Ｃ-3Ｔでは23.8ｍ～24.1ｍであった。土層観察はトレンチの北東壁で行った。Ⅰ-1層（表土，7.5YR３／４暗褐色土，しまり・可塑性ともに弱い），Ⅰ-2層（表土，7.5YR３／３暗褐色土，しまり・可塑性ともに弱い），Ⅰ-3層（7.5YR４／４褐色土・３／３暗褐色土，ローム・ロームブロックを主とする埋土），Ⅱ-1層（7.5YR３／２黒褐色土，Ｃ-3Ｔでは通路として利用されていたため硬化している），Ⅱ-2層（7.5YR３／２黒褐色土，焼土粒子・炭化材片をまばらに含み，径１～５㎜の黄色スコリアを含む），Ⅱ-3層（7.5YR３／２・２／２黒褐色土・４／４褐色土が混じり合う，耕作土か），Ⅱb層（7.5YR３／３暗褐色土，褐色土が斑状に入る，新期富士テフラ層），Ⅱc層（7.5YR４／３・４／４褐色土，ローム漸移層），Ⅲ層（7.5YR４／４褐色土，ソフトローム）という層序を確認した。

遺構は，Ｃ-3Ｔで溝跡を検出した。幅0.7～0.9ｍ，深さは0.3ｍ前後，覆土は7.5YR２／２黒褐色土で壁際にはロームが混じり，しまりは弱かった。覆土から近世のかわらけ１点が出土した。近世～近代の溝跡と判断した。遺物は他にＣ-5Ｔから素焼土器の細片が１点出土した。かわらけを図示した。

調査のまとめ

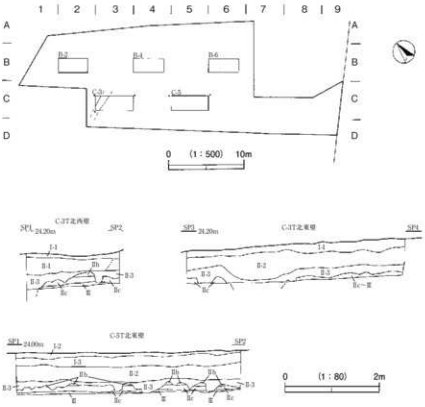
近世～近代の溝跡１条とかわらけ等を検出した。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会（2002年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成13年度』（ａ地点）

八千代市教育委員会（2008年）『千葉県八千代市逆水遺跡ｆ地点ほか―不特定遺跡発掘調査報告書Ⅴ―』（ｂ地点）

八千代市教育委員会（2013年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成24年度』（ｃ地点・ｄ地点）



第28図　北裏畑遺跡ｅ地点トレンチ実測図

第29図　北裏畑遺跡ｅ地点出土遺物

第８表　北裏畑遺跡ｅ地点出土遺物

No.	出土地点	器形	部位・状態	計測値（cm）	○粘土，石材　●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	C-3G	小魚	口縁～底部 約１/４	復元口径9　復元底径4 高27	○雲母，細砂，微砂 ●内）浅褐色　外）浅褐色，褐色	ロクロ成形，内）横方向ナデ，外）化粧土のような焼成粘土付着。 横方向ナデ。底外）赤切痕。	かわらけ

図版13　北裏畑遺跡ｅ地点

（1）調査状況－１－

（2）調査状況－２－

（3）C-3T北西壁土層断面

（4）C-3T北東壁土層断面

（5）C-5T土層断面

（6）出土遺物

12. 上高野白幡遺跡 a 地点

遺跡の立地と概要

上高野白幡遺跡は，市域東部，東を高野川（あるいは小竹川）の谷津（毘沙谷津）に，北を森下谷津に，西を家（の）下谷津によって画された，標高20～26mの台地上に所在する。

本遺跡においては，これまでに県道建設に先行して（財）千葉県教育振興財団によって発掘調査が行われ，弥生時代中期の集落跡が検出されている。

市としては今回が本遺跡での初めての調査である。今回の地点は遺跡中央部の標高24mの平坦地である。砂利敷きの駐車場のようになっており，一部谷の埋め立て地と考えられ，地形は改変されていると予想された。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて10mごとに区画し，アルファベットと数字の組合せで大グリッドを表現し，さらにこれを5mごとに4つの小グリッドに分け，1～4の枝番号を付けた。2m×5mのトレンチを大グリッドに1箇所を原則として配置し，45箇所合計450㎡分を設定した。これらを人力及び重機で掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は，平成25年3月14日から3月26日で，14日機材搬入，環境整備，杭設置，トレンチ設定。15日～22日重機による掘削，トレンチ内精査。18日～25日土層調査，実測記録。22日～26日重機による埋め戻し，機材を撤収し，調査を終了した。

調査の概要

A-2G及びA-10Gにおいて地山を検出しようとしたが，いずれも3.5mの深さまで掘っても盛土・埋土が続き，地山の検出には至らなかった。その他のトレンチにおいても1.5mの深さでは地山に至らなかった。土層の観察所見は，調査区西部のC-2G・C-3Gの北壁・西壁の土層を示した。Ⅰ-1（表土の砕石），Ⅰ-2（黄

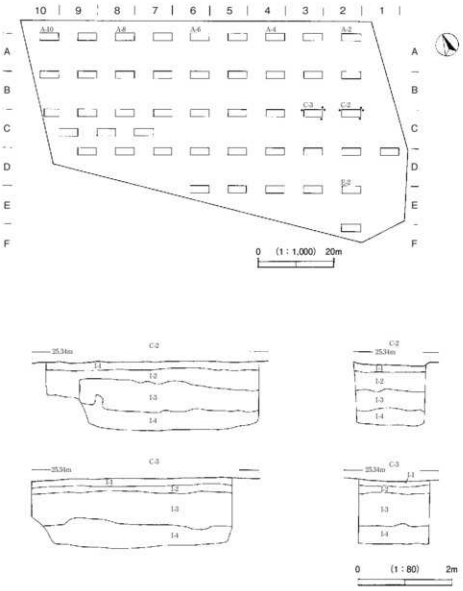
第30図　上高野白幡遺跡 a 地点位置図

褐色土，ロームの盛土），Ⅰ-3（黄褐色土，暗褐色土が混じる。ロームの盛土），Ⅰ-4（黒褐色土，白色粘土が混じる。コンクリートブロック等が混じる）という状況であった。

遺構・遺物とも検出されなかった。

調査のまとめ

土層の遺存状態は不良で，遺構・遺物とも検出されなかった。



第31図　上高野白幡遺跡ａ地点トレンチ実測図

図版14　上高野白幡遺跡ａ地点

（１）調査状況－１－

（２）調査状況－２－

（３）A-2G掘削状況

（４）A-10G掘削状況

（５）C-2G北壁土層断面

（６）C-2G東壁土層断面

13. 新東原遺跡ｌ(エル) 地点

遺跡の立地と概要

本遺跡の立地については，９．ｋ地点の項を参照されたい。

今回のｌ地点は，遺跡の中央部に位置する。標高は25m前後の平坦な畑地である。

調査の方法と経過

建設予定住宅の基礎部分を避けて，２ｍ×５ｍのトレンチを任意に３箇所合計30㎡分設定し，人力及び重機でこれらを掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は，平成25年３月18日から３月21日で，18日機材搬入，杭設置，トレンチ設定，環境整備，人力による掘削，19日・21日重機による掘削・埋め戻し，トレンチ内精査，土層調査，実測記録。21日機材を撤収し，調査を終了した。

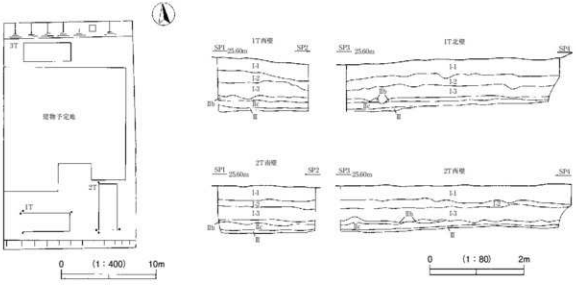
調査の概要

土層の観察所見としては，調査区南部の１Ｔ・２Ｔでは，Ⅰ-1層（表土，7.5YR３/３暗褐色土，しまり・可塑性ともに非常に弱い，耕作土），Ⅰ-2層（7.5YR３/３暗褐色土・４/４ローム褐色土が混じり合う，しまり強く，可塑性弱い，砕石をまばらに含む），Ⅰ-3層（7.5YR３/３暗褐色土，径0.5～５㎜の黄色スコリアを多量含む。旧表土か），Ⅱb層（7.5YR４/３褐色土・４/４褐色土が斑状に入る，径１～３㎜の黄色スコリアを含む。新期富士テフラ層），Ⅱc層(7.5YR４/３・４/４褐色土，径３～５㎜の黄色スコリアをまばらに含む。ローム漸移層)，Ⅲ層（7.5YR４/４褐色土，ソフトローム）という層序を確認した。地表面標高は25.3m～25.5mであるが，上層のⅠ-1・２層に当たる厚さ0.4m～0.6mは盛土と判断した。Ⅲ層上面の標高は概ね24.4mで一定していた。

遺構・遺物とも検出されなかった。

調査のまとめ

遺構・遺物とも検出されなかった。



第32図　新東原遺跡ｌ地点トレンチ実測図

図版15　新東原遺跡Ⅰ地点

（1）調査状況

（2）1T西壁土層断面

（3）1T北壁土層断面

（4）2T南壁土層断面

（5）2T西壁土層断面

（6）3T完掘状況

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよし　しないいせきはっくつちょうさほうこくしょ　へいせい25ねんど
書名	千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成25年度
副書名	仲西遺跡ａ地点　勝田大作遺跡ｂ地点　麦丸遺跡ｉ地点　川崎山遺跡ｒ地点　内野南遺跡ｆ地点 内野南遺跡ｇ地点　小板橋遺跡ｆ地点　持田遺跡ｄ地点　新東原遺跡ｋ地点　堰場台遺跡ａ地点 北裏畑遺跡ｅ地点　上高野白幡遺跡ａ地点　新東原遺跡ｌ地点
編著者名	常松成人
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田138番地２　TEL 047（483）1151代表
発行年月日	平成26年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
仲西遺跡ａ地点	八千代台西十丁目521番24の一部	1221	248	35度 41分 54秒	140度 4分 52秒	平成24年４月17日 ～ 平成24年４月18日	６／50	個人住宅
勝田大作遺跡ｂ地点	勝田637番２	1221	254	35度 42分 ９秒	140度 ７分 33秒	平成24年４月20日 ～ 平成24年５月９日	280／ 2,975	宅地造成
麦丸遺跡ｉ地点	大和田新田字麦丸台640番２・14	1221	151	35度 44分 28秒	140度 ６分 14秒	平成24年５月11日 ～ 平成24年５月24日	156.8／ 1,319.13	宅地造成
川崎山遺跡ｒ地点	萱田字中台2256番22	1221	241	35度 43分 24秒	140度 ６分 29秒	平成24年６月12日 ～ 平成24年６月14日	20／200	宅地造成
内野南遺跡ｆ地点	吉橋字内野1072	1221	289	35度 44分 ８秒	140度 ４分 35秒	平成24年７月５日 ～ 平成24年８月８日	1,064／ 10,790	倉庫建設
内野南遺跡ｇ地点	吉橋字内野1076-1，1077-8・12， 1078-2	1221	289	35度 44分 ７秒	140度 ４分 40秒	平成24年８月10日 ～ 平成24年８月29日	341／ 4,428	工場建設
小板橋遺跡ｆ地点	大和田字台田道230-33・38の 各一部	1221	245	35度 42分 55秒	140度 ６分 30秒	平成24年９月４日 ～ 平成24年９月10日	30／ 277.38	宅地造成
持田遺跡ｄ地点	村上字松葉1186-３・６， 1187-８・９，1189-1の一部， 1189-2，1190-1，1184-5	1221	200	35度 43分 47秒	140度 ６分 59秒	平成24年９月６日 ～ 平成24年９月18日	100／ 1,470.14	宅地造成
新東原遺跡ｋ地点	勝田字新東原1291-4	1221	259	35度 42分 ５秒	140度 ８分 19秒	平成24年11月７日 ～ 平成24年11月15日	78／ 777.5	宅地造成
堰場台遺跡ａ地点	大和田字堰場台283番１， 字堀込250番９	1221	292	35度 42分 49秒	140度 ６分 16秒	平成24年12月26日 ～ 平成25年１月21日	729／ 7,806.27	宅地造成
北裏畑遺跡ｅ地点	萱田町字萱田道798-4・６・７	1221	242	35度 43分 16秒	140度 ６分 23秒	平成25年１月18日 ～ 平成25年１月25日	44／411	宅地造成

上高野白幡遺跡 a 地点	上高野字柴栗708番２・３・４	1221	222	35度 44分 32秒	140度 ８分 11秒	平成25年３月14日 ～ 平成25年３月26日	450／ 6,551	太陽光 パネル設置
新東原遺跡 i 地点	勝田字新東原1247番21	1221	259	35度 42分 ７秒	140度 ８分 ９秒	平成25年３月18日 ～ 平成25年３月21日	30／ 335.9	個人住宅

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仲西遺跡 a 地点	包蔵地	奈良・平安時代	なし	なし	
勝田大作遺跡 b 地点	集落跡	奈良・平安時代	なし	奈良・平安時代土師器	
麦丸遺跡 i 地点	包蔵地	縄文時代，古墳時代， 奈良・平安時代	近世・近代溝跡１条， 近・現代溝跡１条	縄文土器， 奈良・平安時代土師器	
川崎山遺跡 r 地点	集落跡	旧石器，縄文，弥生， 古墳，奈良・平安時代	なし	古墳時代土師器	
内野南遺跡 f 地点	包蔵地・ 集落跡	縄文時代，奈良時代	なし	縄文土器	
内野南遺跡 g 地点	包蔵地・ 集落跡	縄文時代，奈良時代	なし	縄文時代礫， 奈良・平安時代土師器	
小板橋遺跡 f 地点	包蔵地・ 集落跡	縄文時代，近世	縄文時代陥穴１基	近世素焼土器	
持田遺跡 d 地点	集落跡	縄文時代，古墳時代， 奈良・平安時代，中世	近世・近代溝跡２条	中近世陶磁器	
新東原遺跡 k 地点	包蔵地	縄文時代， 奈良・平安時代	なし	なし	
堰場台遺跡 a 地点	集落跡	縄文時代，古墳時代	縄文時代竪穴住居跡１軒・陥穴１基・土坑４基， 古墳時代竪穴住居跡３軒，古墳周溝１条	縄文土器， 古墳時代土師器	
北裏畑遺跡 e 地点	包蔵地	近世・近代	近世・近代溝跡１条	近世かわらけ	
上高野白幡遺跡 a 地点	包蔵地・ 集落跡	縄文時代，弥生時代， 古墳時代，奈良・平安時代	なし	なし	
新東原遺跡 l 地点	包蔵地	縄文時代， 奈良・平安時代	なし	なし	

要　約	仲西遺跡ａ地点	本地点は造成工事等の影響を受け，遺跡としては破壊されていることを確認した。
	勝田大作遺跡ｂ地点	遺構検出には至らなかったが，良好な土層と土師器を中心とした多くの遺物を確認した。付近に縄文時代や古墳時代後期，奈良・平安時代の遺構が存在している可能性を示唆する結果と評価できよう。
	麦丸遺跡ｉ地点	地表面で多数の土師器片を採集したが，発掘の結果は，縄文土器が主体であった。早期条痕文の繊維土器と中期加曽利E式が出土した。遺構は近世～現代の溝跡２条が検出された。
	川崎山遺跡ｒ地点	遺物は縄文土器と土師器合計２点が出土した。遺構は検出されなかった。
	内野南遺跡ｆ地点	比較的良好な土層を確認した。遺物は，縄文土器等を検出したが，分布は疎であった。遺構は検出されなかった。
	内野南遺跡ｇ地点	縄文時代の焼礫２点が出土した。塚状・土塁状の高まりは，現代の盛土と判断した。遺構は検出されなかった。
	小板橋遺跡ｆ地点	遺構としては，縄文時代の陥穴１基と近世・近代の溝跡１条を検出した。遺物は近世の素焼土器１点であった。
	持田遺跡ｄ地点	遺構は，近世～近代の溝跡２条を確認した。遺物は近世～近代の陶磁器を主体としていた。一部に中世の遺物が検出され，正覚院館跡の周辺遺跡と捉えることもできる。
	新東原遺跡ｋ地点	遺構・遺物は検出されなかった。土層の観察所見として，粘土層の在り方が標準層序とは異なっていることが特筆される。
	堀場台遺跡ａ地点	攪乱は激しかったが，遺構として竪穴住居跡や堀場台古墳の周溝等を検出し，遺物として縄文土器や古墳時代の土師器を確認することができた。
	北裏畑遺跡ｅ地点	近世～近代の溝跡１条とかわらけ等を検出した。
	上高野白幡遺跡ａ地点	土層の遺存状態は不良で，遺構・遺物とも検出されなかった。
	新東原遺跡ｌ地点	遺構・遺物とも検出されなかった。

千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書
平成 25 年度

発　行　日　　平成 26 年 3 月 25 日
編集・発行　　八千代市教育委員会　教育総務課
〒 276-0045　八千代市大和田 138-2
TEL　047-483-1151
印　　刷　　金子印刷企画